

天使たちの課外活動5

笑顔の代償

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

1

その日、プライツイヒ高校は半日授業だった。連邦大学の中学高校は基本的に土曜日は休みだが、臨時の講習や行事が行われることもある。

今日は授業参観だったのだ。

ただし、参観に来たのは在校生の親ではない。

近い将来、プライツイヒ校への入学を考えている中学生たちとその父兄だ。

つまりこの授業参観は校内見学会を兼ねている。

プライツイヒはログ・セール西岸に建つ名門校で、入学希望者も多い。

とはいえ、中学生にとって一生を左右する大事な選択だから、ほとんどの生徒は早いうちから複数の学校を吟味^{ぎんみ}して検討する。

そのため、名門校ほど定期的にこうした見学会を開くのである。

二時間の授業の後は各種研究会や部活動が行われ、その様子を見学することができる。

日頃は十代の少年少女の姿しかない校舎も今日はさまざまな年代の人が行き交い、違う建物のようだが、部活動をやっていない生徒は授業が終われば下校するが、彼らも部外者に対して礼儀正しく振る舞い、母校の良さをさりげなくアピールしている。

これは在校生として当たり前のことだ。

優秀な学校には優秀な生徒が集まる。自分たちの素行や部活動の様子を見せることによって、優秀な生徒が来てくれれば母校の名声も高まるからである。従って、この見学会には生徒以上に教師陣が力を入れている。

その筆頭が校長のベネディクト・オーデインだ。オーデインは二時間目の授業が終わると同時に、二年生の教室を訪ね、下校しようとしていた一人の

生徒に声をかけたのである。

「ミスタ・ファロット。少しいいかね」

「何でしょう？」

「わたしの友人がこれから急に来ることになってね。ここの卒業生でもある」

「お友達ですか？」

「ああ。もう到着するはずだ。実はね、彼に理事を引き受けてもらいたいと思っているんだよ」

「プライツィヒ校は先日、理事の一人に欠員が出た。体調不良が原因である。」

「通常の任期を終えずに辞めたのだから、代わりの理事を選挙で選ぶことになる。」

「校長の友人は最近、近所に越してきたそうだ。」

「その人は裕福な事業家で、母校のプライツィヒにこれまでも多額の寄付をしている。」

「しかも彼には中学三年生の息子がいて、今まさに高校を選別している時期だという。」

「つまり、校長の友人としては、息子の通う高校の

理事なら引き受けようと思っっているわけだ。」

「オーデイン校長としてはぜひ友人の息子に、この学校を気に入ってもらいたい。」

「そのためにも学校一の秀才の口から母校の良さを伝えてほしいのだが、相手は意外にも眉を擧げた。」

「今からですか？」

「ああ。彼の息子も一緒に来るそうだ。昼までには終わるだろう。少し話をしてくれればいいんだよ」

「今日の授業は二時間だけなので、まだ十一時前だ。少し時間を割いてもらいたいという校長の希望は決して無茶なものではないが、少年は首を振った。」

「申し訳ありませんが、これから約束があります」

「オーデイン校長は驚いた。」

「耳を疑ったと言ってもいい。」

「二年生のヴァンツァー・ファロットはこの学校の有名人だった。」

「二年連続学年一位という成績もさることながら、ずば抜けて容姿端麗で品行方正、さらにはスポーツ

万能と、ある意味できすぎの男子生徒である。

欠点があるとしたら感情に乏しいことだろう。

多感な年頃の少年なのに、彼の笑顔を見たことがある生徒も教師もほとんどいないのだ。

いかに愛想がないかがよくわかる。

よく言えば沈着冷静だが、悪く言えば何か情緒に問題があるのでと疑われるくらい淡々としていて、喜怒哀楽を表に出すことがない。

特に顕著なのが女子に対する素っ気なさだ。

プライツィヒ校は共学だし、連邦大学は高校生の恋愛を禁止したりはしていない。

プライツィヒには才色兼備の女生徒も多いのに、彼は女生徒を傍へ寄せつけようとしない。

必要最低限の会話はするものの、どんな美少女が笑顔で話しかけても、にこりともしない。

好意を寄せられても告白されても、冷たい態度は微塵も揺るがず、にべもなく断っている。

玉碎した女子は他校の生徒も含めれば二十人

は利かないはずだ。

その態度から潔癖な女嫌いとみなされて、同性愛嗜好の男子生徒に接近されたこともあるようだが、こちらも徹底的にはねつけている。

ついた渾名が『永久凍土の貴公子』だ。

（『氷』がグレードアップしたものと思われる）

しかし、彼は教師陣に対しては至って礼儀正しく、従順だった。特に学校や勉強に関する頼みごとならまず断ることはなかった。入学以来、一度もだ。

だから校長は恐る恐る食い下がってみた。
「三十分でいいんだが……？」

「無理です」

即行で答えられてしまう。

事前に約束しておかなかった校長が迂闊と言えは迂闊だが、これに関しては誰も校長を責められない。

普段のヴァンツァーなら、こうした場合の校長の頼みを断ることなどあり得ないからだ。

二の句が継げないオーディン校長を尻目に、彼は

儀礼的に頭を下げた。

「急ぎますので、これで失礼します」

運動場では各運動部が練習を行っていた。

運動部にとっては土曜日に登校して練習するのは珍しくないが、こうも大勢の部外者がいるとやはり勝手が違う。少しばかりやりにくく、いいところを見せようと張り切る要因にもなる。

そこに、午前中の陽射しに照らされながら、型式こそ古いものの本格的なスポーツカーがやってきて、運動場横の臨時の駐車場に停まった。

車好きな男子がめざとく気づいて歓声をあげる。

「すごい！ ラヴレスだ。スペシャルかな？」

「ロードエグゼクティヴだよ！」

「かっこいいなあ！」

いったいどんな男が運転してきたのかと思いきや、意外にも、運転席から降りてきたのは小柄な中年の女性だった。しかも、その女性は後部扉を開けると、

そこに寝かせていた赤ちゃんを抱き上げたのだ。

見ていた生徒たちはさすがに驚いた。

赤ちゃんを抱いた女性は珍しげに辺りを見渡し、

運動場の傍を横切つて校舎に向かった。

部活動の様子を父兄に見てもらうために、今日は意図的にこの場所に通路を設けてある。

その女性が校内に入ると、居合わせた生徒たちがやはり眼を丸くした。

外部の人間が大勢やってくる校内見学会とはいえ、一歳にも満たない赤ちゃんの登場は珍しい。

だが、見学会に来た中学生の母親の一人が遅れて到着したのだろうと、生徒たちは思った。

むしろ部外者には親切にするのが礼儀であるから、居合わせた生徒の一人が気遣つて話しかけた。

「どなたかと待ち合わせですか？」

女性は笑顔で頷いた。

「ええ。入口でという約束だったのでですけど、少し早かったようです」

「呼び出しましょうか。お名前は？」

「ありがとうございます。二年生のヴァンツァー・ファロットさんをお願いします」

尋ねた生徒はもちろんだが、たまたま近くにいて、これを聞いた生徒たちは大いに驚いた。

全員が思わず『えっ？』と振り返ったくらいだ。

何故なぜと言って、赤ちゃんを抱いた女性と学校一の秀才がどうしても結びつかなかったからである。

女性に話しかけた生徒は混乱して、よほど『もう一度名前をお願いします』と確認をとうとうとしたが、その前に本人が急ぎ足でやってきた。が、今度こそ生徒たちは絶句する羽目になった。

なぜならば――。

「すみません。お待たせしましたか？」

たとえ真夏に雪が降ったとしても、真昼に幽霊おんりが出たとしても『歯を見せる笑顔で嬉しうれそうに女性に話しかけるヴァンツァー』なんていう怪奇現象を、この世で拝めるとは思っていなかったからだ。

だが、赤ちゃんを抱いた女性だけはその異常さにまったく気づいていないようで、屈託くつたのない笑顔で彼に話しかけている。

「久しぶり。少し見ない間に立派になったわねえ」
「あなたもお元氣そうで何よりです。――この子がタイムですか？」

「ええ、そうですよ。ご挨拶あいさつしなさいな、タイム。ヴァンツァーお兄ちゃんですよ」

この単語に生徒たちが悲鳴をあげなかったのは、ひとえに度肝どきまを抜かれて舌したが動かなかったからだ。

赤ちゃんは生まれたばかりの月齢ではない。
生後、半年は過ぎているだろう。

首もすっかりと据わって、上体を起こして母親の腕に抱きかかえられながら、ぱっちり大きな眼でヴァンツァーを見つめている。

そんな赤ちゃんにヴァンツァーはにっこり笑って、明るい声で話しかけたのだ。

「やあ、タイム。こんにちは」

このくらいの赤ちゃんは人の感情に実に敏感だ。忠実に反射すると言ってもいい。

不機嫌な人に出会えばたちまち顔が曇つてぐずり始めるし、逆に純粹な好意を向けられれば、すぐに機嫌が上向きになる。この時もそうだった。

赤ちゃんは本当に嬉しそうに笑い、紅葉のような手をヴァンツァーに伸ばした。

普段は水のような光を浮かべているはずの藍色の瞳が軽い驚きと喜びに緩み、女性に問いかける。

「さわつても大丈夫ですか？」

「もちろんですとも。——よかつたわねえ、ティム。お兄ちゃんに遊んでもらつて」

生徒たちは完全に凍りついていた。

あのヴァンツァーが——永久凍土の貴公子が！ いったいどれほど強烈な陽射しを浴びればここまで劇的な雪解けを迎えるというのか、こともあろうに笑み崩れながら、自分の指を小さな赤ちゃんの手に掴ませたりなどして、あやしてやっているのだ。

男子生徒が全員、この世の終わりを実感したのは当然だが、この様子を目の当たりにした女子生徒はまさしく恐慌状態に陥っていた。

生徒ばかりではない。彼の後を追ってきた校長も絶句して立ちつくしている。

そんな校長をいつも通りの静かな眼で振り返って、ヴァンツァーは言った。

「ご覧の通り、こんな小さなお子さん連れの女性を待たせるわけには参りません」

女性のほうが少し慌てて言うてくる。

「あら、ヴァンツァー。わたしは平気よ。ティムと一緒に待たせてもらうから、学校の用事があるならそちらを優先させてくださいな」

「いいえ。あなたとの約束のほうが遥かに大事です。申し訳ありませんが、校長。そういうことですので、お話は後日またあらためて伺います」

オーティン校長も生徒たちも何も言えなかつた。これは何かの間違いではないのかと彼らが自分の



耳と正気を疑っている間に、ヴァンツァーは女性を護衛するよう^{エスコート}にして校舎を出て行ったのである。

気の毒だったのは運動部の生徒たちだ。

『赤ちゃんを抱いた女性と肩を並べて仲良さそうに歩く、満面の笑みを浮かべたヴァンツァー』という異常現象をまざまざと見せつけられたのだから。

今まさにスタートを切ろうとしていた陸上選手は硬直したまま動けず、球を打ち返そうとした庭球の選手は見事に空振りし、フットボールの選手たちも棒立ちになってパスを素通りさせる有様で、全員が全員、呆気にとられて二人を見送る羽目になった。

洋弓部の練習場が屋内にあったのは幸いだった。

もし屋外で練習していたら——そしてこの様子が洋弓部の彼らの眼に入っていたら、矢は間違いなく明後日の方向に飛んでいっただろう。

ヴァンツァーが助手席に、女性が運転席に座って、後部座席に赤ちゃんを寝かせた赤いスポーツカーはすべるような動きで校庭を出て行った。

さらなる被害者はエクサス寮生だった。

土曜の昼にも拘わらず、寮には結構な数の寮生が残っていた。

土曜は面会日でもある。

エクサス寮には複数の学校の生徒が暮らしていて、連邦大学の生徒は共和宇宙全域から進学してくる。

中には宇宙船の関係で、なかなか実家に帰れない生徒もいるので、そんな時は家族から会いに来る。

先程のプライツィヒ校と同様、日頃は少年少女の姿しかない建物に今はさまざまな年代の人がいた。

同世代ながら、普段は別の寮で暮らしている少年少女の姿もある。他の寮の友人や恋人を自室に招く寮生もいるからだ。

ヴァンツァーは去年からこの寮に暮らしているが、彼を訪ねてくる家族はいない。彼に一人の身寄りもないことは寮生の誰もが知っている。

ヴァンツァーは仕事中毒ならぬ勉強中毒で休日も

もれなく予定を入れている。外出する場合は博物館、科学館、文化芸術方面の展示会や講習会などへ赴き、自室にいる場合は間違いなく自習している。

今日はプライベートイ校で半日の授業があったのは他校の寮生も知っている。

だからヴァンツァーが自室に戻ってきたのを見た寮生たちは、彼はここで昼食を食べ、午後は自室で勉強する予定なのだろうと誰もが思った。

ところが、彼は珍しくも少しかしこまった服装に着替えて、すぐに部屋を出たのである。

エクサス寮は入口を入ると右手にちよつと開けた空間が設けられている。

高い窓から明るい光が差し込み、座り心地のいい長椅子がゆつたりと並べられ、雑談ができるようになっていた。

赤ちゃんを抱いた女性はその長椅子に腰を下ろし、子どもをあやしていた。

これを見たエクサス寮生も他寮の生徒も、小さな

赤ちゃんの姿に驚いていたが、今日は面会日だ。

誰の家族だろうと思っていると、急ぎ足で階段を下りてきたヴァンツァーが女性に近づき、誰も見たこともないような笑顔で言ったのだ。

「お待たせしました」

寮生たちが眼を疑ったのは言うまでもない。

彼らの知っているヴァンツァーはとにかく表情が動かない。

口さがない男子は彼は生身の人間じゃない、表情筋がまったく機能していないどころか死滅している。あれは、血の通わない自動機械だと陰口をたたいているくらいなのだ。

そのヴァンツァーと赤ちゃんを抱いた女性など、不釣り合いもいいところである。

長椅子に座った女性は珍しそうに辺りを見渡してヴァンツァーに視線を戻した。

「すてきな寮ねえ。今度また時間のある時にでも、あなたのお部屋も見せてもらいたいわ。もちろん、

「ご迷惑でなければだけど」

女性の向かい側に腰を下ろしたヴァンツァーは、とても社交辞令とは思えない好意的な態度と口調で、しかも抜群の笑顔つきで言つてのけた。

「迷惑なわけがありません。あなたの訪問でしたらいつでも歓迎します」

男子寮生たちは震えあがつた。ほとんどこの世の終わりを感じていたと言つてもいい。

恐怖に駆られた彼らはいっせいに目配せを交わし、誰が何を言うでもなく慌てて物陰に集まり、真剣にヴァンツァーの身体の具合を心配した。

「……自動機械オートマトンが狂つた!？」

「それを言うなら『壊れた』だろう!」

「いいや、ここは喜ぶべきだ! 彼も一応は生身の人間だと証明されたってことじゃないか!」

「そうだ。この場合、何らかの未知の細菌もしくはウイルスに感染した恐れがあると言うべきだ!」

「笑顔が止まらないウイルス?」

「そんな恐ろしい……つて言つてる場合かよ!」

とにかく、ヴァンツァーが平常の彼とはほど遠い状態にあることだけは間違いない。

そして、女子に対しては常に素っ気なく、冷徹で、にこりともしない美少年が、ある特定の女性にだけあふれるような笑顔を絶やさないとすれば、十代の少年たちの考えることは決まっている。

全員、何とも言えない顔で、樂しげに話している子持ちの女性とヴァンツァーをそつと窺うかがつた。

「……年上趣味だったのか?」

「いくら何でもちよつと年上過ぎないか?」

「三十歳は絶対越えてるだろ?」

「おまけに子持ちだぜ……」

一方、女子寮生たちはその恐怖と絶望感をより強烈に感じていた。

連邦大学の寮にはそれぞれ個性がある。

上級生から下級生まで和氣藹々あいきあいと明るく賑やかな寮もあれば、「そういうのはあまり好きじゃない」

「勉強に集中したい」という生徒向けの寮もある。

エクサス寮はどちらかというと後者に属しており、個人主義の寮生が多い、静かな雰囲気だった。

それでも、この寮の少女たちは多少の程度の差はあれ、全員がヴァンツァーに興味を持っている。

中には学業優先主義を前面に押し出して「あんな愛想のない子はお断りよ」と強気な態度を崩さない上級生もいるが、素っ気ない言動を取りながらも、彼を気に掛けていることは間違いない。

ヴァンツァーが入寮して以来、その美貌も冷たい眼差しも少女たちの胸を密かに焦がすものだったが、一年以上、同じ屋根の下で過ごしていながら、彼と『事務的な用件以外で口を利いたことがある女子』は皆無と言っている。

唯一の例外として、彼が笑顔で話す女子がいるが、その子はエクサス寮生ではない。

今のヴァンツァーはその時よりもっと活き活きと楽しそうに、恐ろしいことに笑い声までたてている。

エクサス寮の女子にとっては痛烈な敗北だった。

彼女たちが誰もできなかった不可能を可能にしてみせたのはお世辞にも若くも美しくもない、まさにどこにでもいそうな子持ちの中年女性なのだから。

我に返った女子たちは男子とは別の物陰に急いで集まり、これまた長椅子の二人をそっと窺いながら、蒼白な顔で囁き合ったのである。

「ど、どういうこと？」

「あたしたち、悪夢を見てるの？」

「……まさか、あの子、ヴァンツァーの？」

一人がぼろりと洩らしたこの言葉に、少女たちは過剰に反応した。

「冗談よしてよ！」

「そうよ！ おばさんじゃん！」

見ず知らずの相手に対して著しく礼儀に欠ける物言いではあるが、確かに、赤ちゃんを抱いている女性はヴァンツァーとはかなり歳が離れている。

十代の彼女たちの母親と言っても通る年齢だ。

場所が学校ではなく、彼女たちの家ともいふべき寮ということもあり、自然と言葉も遠慮がなくなり、一人が声を潜めながらも吐き捨てるように言った。

「誰よあのおばさん！」

「うちのママよ」

突如として割り込んだ不機嫌な声に、少女たちは飛び上がった。慌てて振り返れば、そこにいたのはこれまたヴァンツァーが唯一親しくしている女の子、ビアンカ・ローリンソンだ。

彼女はホーマー大学の一年生で、地下高速鉄道で一駅離れたところにあるラムゼイ寮の寮生でもある。エクサスは高校生の寮だから、ビアンカはこの女子たちより年上だ。その貫禄をもつて宣言した。「失礼なこと言わないでよね。タイムはママの子で、あたしの弟よ。それにおばさんじゃないわ。ママの名前はブリジット。いい？」

ビアンカはきれいな少女だった。単に顔の造作や嗜好が整っているだけではない。はつとさせられる

何かがある。今日はずっとおしゃべりしているので、なおさら美しい。

エクサス寮の少女たちはやや怯みながらも果敢に詰問した。

「ビアンカのお母さん？ 似てないね」

「当然よ。血は繋がってないもの」

家庭の事情をあつさり話すビアンカに少女たちはますます面食らった。

「……継母ってこと？」

「何でああなたの継母と彼が仲良くしてるのよ」

「しかも赤ちゃん連れで」

ビアンカは言った。

「今日はこれから家族みんなで昼食会なの」

「家族!？」

少女たちはますます眼を剝いた。

外出用の革靴を履き、きちんとしたジャケットを着ているヴァンツァーを見れば、彼もその昼食会に参加するのは明らかだったからだ。

ローリンソン家の食事会になぜ赤の他人が一緒に行くのか——少女たちは無言ながらもすごい迫力で問いかけ、ビアンカは肩をすくめて説明した。

「ヴァンツァーはパパが招待したのよ。それだけ」

「そ、それだけって！」

悲鳴をあげる少女たちを置いて、ビアンカは軽い足取りで母親とヴァンツァーのところに向かった。

こうなると少女たちには何もできない。

どんなに歯がゆくても黙って見ているしかない。

ブリジット・ローリンソンは義理の娘の姿を見て、

腕に抱いた赤ん坊に話しかけた。

「ほーら、ティム。お姉ちゃんですよ」

「あたしを覚えてくれてるかな？」

大学に入学してから寮生活になってしまったので、この異母弟とは月に数えるほどしか会えないのだ。

ティムはビアンカを見て嬉しそうに笑ったので、

ビアンカは胸を撫で下ろした。

「よかった。忘れられてないみたい」

「覚えていたというよりビアンカが好きなんだろう。

——なあ、ティム」

優しい笑顔で弟に話しかけるヴァンツァーを見て、

ビアンカはびっくりした。

寮の少女たちが誤解するわけだと納得していると、

ブリジットが言った。

「ティムはずっといい子にしたの。お兄ちゃんに

会えたのが本当に嬉しいのねえ」

物陰の少女たちからの視線が実に痛い。

ビアンカは苦笑しながら継母をたしなめた。

「ママ、それ、人に聞かれたら誤解されるわよ」

「あら、どうして？」

ブリジットは不思議そうな顔になり、当のヴァン

ツァーは笑いを噛み殺しながら言った。

「おかしくはないぞ。ティムから見れば俺は立派に

『大きなお兄ちゃん』だ」

ビアンカは大げさにのけぞって見せた。

「……あなたの口から『大きなお兄ちゃん』なんて

言葉が出ると、ものすごい違和感があるわ」

和気藹々と話す彼らを、寮生たちは遠巻きにしている。誰もこの状況で声はかけられないが、そこに唯一の例外が通りかかった。

「あれえ、彼女？」

レティシアも外出するところだったらしい。

彼は笑顔のヴァンツァーを見ても動じず、平気で近寄ってきた。ピアンカが彼を継母に紹介する。

「ママ、彼はレットよ。レティシア・ファロット。ヴァンツァーと同じ名字だけど、全然赤の他人なの。こっちはうちのママのブリジットと弟のティム」

「ども。レットって呼んでください」

軽い調子ながらもレティシアは愛想よく頭を下げ、如才なく赤ん坊を褒めた。

「可愛いですねえ。どのくらいかな？」

「もうじき七ヶ月よ」

「へえ。こんちは、ティム」

レティシアは笑って話しかけ、意外にも赤ん坊は

レティシアを見つめて笑顔になった。

「お、いい子だねえ。今日は何、皆でお出かけ？」

「これから家族で昼食なの。もうお腹ぺこぺこよ」

レティシアはヴァンツァーを見て、呆れたように言ったものだ。

「何でそこにおまえが混ざるんだよ？」

「俺もそう思う」

ヴァンツァーは真顔で頷いた。

「ご家族の団欒にお邪魔するわけには参りませんと、お断りしたんだが……」

ブリジットが後を続けた。

「あなたを連れて行かないと夫がっかりするのよ。せっかくの昼食が暗くなるから助けると思っただけで来てくれない——と、わたしが無理にお願いしたの」

「無理にとはとんでもないことです。お誘い自体はたいへんありがたいことですが、御馳走になるのはいささか心苦しく……」

「まあ、何を言うの。あなたにはどれだけお世話に

なつたかわからないんですもの。お願いですから、

お昼くらい御馳走させてちょうだい」

「かたじけなく思います」

ビアンカが苦笑した。

「ヴァンツァーってママと話してると、時々、時代

言葉になるのよね」

「さあ、そろそろ行きましようか」

子どもを抱いて立ち上がった義理の母を氣遣って、

ビアンカは言った。

「ママ、重いでしょ。あたしが抱こうか？」

「大丈夫よ。車に乗せるだけなもの」

赤ん坊を抱いた母親を中心にしたヴァンツァーと

ビアンカの様子はまるで一つの家族のようだった。

エクサスの寮生たちはプライツィヒ校生と同様、

言葉もなくその様子を見送ったのである。

ヴァンツァーはブリジットを先導するように歩き、

ビアンカは自然とその後が続いた。

レティシアと並んで寮を出る形になったわけだが、

ビアンカは勘のいい少女である。寮生たちの視線や
雰囲気が奇妙に変化したことに敏感に気がついた。

正しく言えば、自分たちにはない。

レティシアが加わってから明らかに変化した気が

したので、思わず尋ねていた。

「レット。あなた、何かやった？」

唐突な質問に、レティシアはきよとんとなった。

「何かって、何が？」

問い返されてビアンカは少し考え、声を潜めた。

「何でもないならいいけど、妙な感じがしたから」

「そりゃあ、あの朴念仁ぼくねんじんが笑顔全開でいるからだろ。

——じゃあな」

軽く手を上げて、レティシアはビアンカたちとは

別方向に歩き出し、ビアンカも足早に車に向かった。

ブリジットが慣れた手つきで、弟を後部座席の

補助装置ベビシットに固定している。弟もいやがらないので、

ビアンカは苦笑した。

「大きくなったらタイムも驚くでしょうね。自分が

この車に寝かされていたなんて」

車の外で待っていたヴァンツァーが尋ねる。

「何かおかしいのか？」

「この車、間違っても家族向けじゃないからよ」

四人乗りではあるが、プライツィヒの男子生徒が

言ったように本格的なスポーツカーなのだ。

乗りやすい大衆車とは一線を画している。

息子を補助装置に寝かせたブリジットは運転席に座ってシートベルトを掛けながら笑って言った。

「それ、車友達にも言われたわ。うちのL21に補助

装置をつけてティムを乗せてるのよって言ったら、

ずいぶん大きさに驚いてね」

「でしようね。あたしも大学の友達で、車に詳しい子に言ったら『嘘うそだろ!』って眼を剥かれたもの」

助手席に座ったヴァンツァーにだけは何の話か、

意味がわからない。

ビアンカは後部座席、弟の隣である。

四人を乗せた車はすべるように発進した。

ブリジットは自動操縦装置を使わず、自分の手で操作しているが、車はまったく揺れることはなく、ティムもおとなしくしている。

助手席のヴァンツァーが時々、後ろを振り返って子どもに笑いかけてやるので、ビアンカは驚いた。

「ずいぶん赤ちゃんに慣れてるのね」

「そうか？」

「そうだと思うわ。あなたくらい年齢の男の子だと赤ちゃんとの接し方なんてわからないでしょう」

ビアンカのように小さな弟妹がいれば話は別だが、ヴァンツァーは天涯孤独の身の上である。

赤ん坊に慣れる機会はなかったはずとビアンカが考えるのもおかしくないが、以前のヴァンツァーは比較的、子どもや赤ん坊と接する立場にあった。

それは言わずに、彼は言った。

「慣れているとは思わないが、赤ん坊には基本的に笑顔で話しかけるものだろう」

ビアンカはますます眼を丸くした。

「あなた、保育学も取ってるの？」

「単なる一般常識だ」

「ねえ、その一般常識を知っていて実践じっせんできる男子

高校生なんて、ものすごく珍しいって自覚ある？」

「ない。——珍しいのか？」

「と思うわよ」

ビアンカは頷き、運転席のブリジットが言った。

「ヴァンツァーは何でもできるのねえ。残念だわ。

家が近かつたら子守をお願いしたのに」

「それはさすがに引き受けかねます。本職のほうが

安心でしょう」

ヴァンツァーは苦笑して辞退したが、ビアンカも

母親に同意した。

「タイムもあなたが好きみたいよ。あなたが笑顔で

話しかけてくれるからかもね。——ママの子だから

愛想よくしてるの？」

こんなことを尋ねたのは、日頃のヴァンツァーの

言動を思い返すにつれ、とても『子ども好き』とは

思えないからだ。

果たしてヴァンツァーは真顔で頷いた。

「それもあるが、タイムはいい子だからな」

エクサス寮の少年たちが聞いたら今度こそ真剣に

『謎のウイルス感染』を疑ったはずである。

ビアンカも眼を丸くした。

「まだ六ヶ月なのに、いい子かどうかわかるの？」

「ある程度は」

「興味あるな。あたしも保育学は取ってないけど、

参考までに聞かせてくれる？」

ヴァンツァーは少し考えた。

今まで見てきた赤ん坊と母親の様子を思い出して、

その経験から言った。

「子どもは親の鏡だからな。特に小さな赤ん坊は、

母親の人格にもろに影響を受ける。母親が神経質な

性格なら、子どもも不安定で癪かたが強く、夜泣きする

子が多い」

当のブリジットが反論した。

「あら、それは言い切れないと思うわ。お母さんがおっとりしていても、夜泣きする子はするわよ」

「ええ。ですが、少なくとも母親が神経過敏なのに赤ん坊は鷹揚おちようという例は見たことはありません」

ピアンカが吹き出した。

「赤ちゃんが鷹揚？」

「俺も赤ん坊は専門外だから適切な言葉がわからん。赤ん坊は泣くのが仕事というが、そこにも泣き方の違いというものがある。どうあやしても泣きやまず、母親が疲弊ひへいこんぱい困憊こんぱいしてしまう赤ん坊も実際にいる」

ブリジットが頷いた。

「それは母親学級で習ったわ。いわゆる育てにくいお子さんね」

「ティムは育てやすいお子さんでしょう？」

「そうねえ。それはこの子だってもちろん泣くけど。」

赤ちゃんが泣かなかつたら大変ですものね」

「その通りです」

ヴァンツァーは背後を振り返って言った。

「俺やレティーといった知らない相手でも恐れずに見返してくるのは好奇心が芽生えているからだろう。ブリジットやピアンカを見ると嬉しそうに笑うのは感受性が育っている証拠だ。ブリジットがティムに豊かな愛情を注そそいでいるのがよくわかる」

ブリジットが嬉しそうに言った。

「まあ、光栄だわ。何しろこの年で、初めて母親になったものだから、ちゃんとできているか心配で」

「あなたは最高の母親で、最高の運転手です」

ピアンカの生家は南大陸のグランピアにある。

北半球のログ・セールまでくるのはちよつとした小旅行だが、ブリジットの運転技術は半端はんぱではない。

車は海岸線を走り、岬への幹線道路から外れて、ひなびた通りに建つ一軒家の駐車場に入った。

普通の民家を改造してレストランにしたもので、ここは『赤ちゃん連れのお母さまも快適なお食事を楽しんでいただけます』というのが売りである。

完全個室制で、室内には授乳室とおむつ交換台を

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。